

伊賀の自然

第3回

『キビタキ』

武田恵世

6月は野鳥の囀り(さえずり)の最盛期です。写真はキビタキと言う夏鳥で、伊賀では青山高原



『キビタキ』 撮影：安藤宜朗

に多く生息しています。4月下旬頃に東南アジアから日本に渡ってきて、コナラやブナなどの広葉樹林で暮らしています。森林の中層のよく茂ったあたりにいるので、中々見ることができません。囀りは「ピッコロリー、ピッコロリー」または「ツクツクホーシ、ツクツクホーシ」と聞こえる、高い大きな美声です。雄は、喉が原色のオレンジ色、そして黄色、黒色、白のきれいな模様です。この鮮やかな模様は森の中では迷彩色になるようです。黄色と黒と、色の差が大きいので木漏れ日の中では鳥の形に見えにくいようです。雌はオリーブ色を帯びた薄茶色で、下面は白色の地味な渋い色合いです。雌は更に迷彩色を極めているのかも知れません。この色の違いは、実は婚活のためです。野鳥の多くは雌が雄を選ぶ権利があつて、雌は、子育てに良い場所に住んでいて、色のきれいな、鳴き声の美しい、求愛ダンスを作法通りにキチンと踊れる雄を選んで結婚します。雌は気に入った雄のところに行つて、じっくり品定めをして、雄がくれたプレゼントが気に入ると受け取つてオーケーのサインを出します。プレゼントの多くは新鮮な虫です。雄のなわばり争いはかなり激しく、くちばしをパチパチと鳴らして威嚇したり、ブーンと蜂のような羽音を出して追いかけたり、地面で取っ組み合つたりと必死です。食べ物は主に昆虫類です。特に、枝先で待っていて、飛んでいる虫を見つけるとサツと飛び上がつて捕まえ、また元の枝に戻り、フライングキャッチと言う捕り方を得意としています。梅雨の晴れ間に、ぜひ美しい囀りを聞き、婚活ぶりやフライングキャッチを見に、伊賀の周囲の山々に行つてみてください。

伊賀の山並み

さて今回は、伊賀盆地の中央にある久米山です。標高191・2m、昭和の市町村大合併(1953)1961年)まであった久米村の中心でした。写真は、ある日の夕暮れに最高峰が浮かび上がっているところです。現在、名阪国道が貫いているところを含めて古墳が多い山で、古代には重要な場所であつたことがうかがえます。また、室町時代までは大きな寺院や城塞もあつたようです。私は小学校の頃から上野桑町で過ごしていたので、夏休みには早起きを競い合つて、平家や源氏を捜しに通つたものです。平家とはカブトムシ、源氏とはクワガタムシのことです。主に夜行性なので、朝出来るだけ早くに、朝露やマムシなどを物ともせず

にポイントに行つた子が勝ちだったのです。6月の末から、虫とりシーズンがはじまります。

久米山の夕暮れ



武田恵世

歯科医師、歯学博士伊賀市上野桑町で開業。伊賀市環境保全市民会議レッドデータブック作成委員会委員長。環境省希少野生動植物種保存推進員。日本鳥学会、日本生態学会会員他。著書に「風力発電の不都合な真実」(アットワークス刊)などがある。